
わたし、不良品なんです

夢想花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わたし、不良品なんです

【Nコード】

N5106Z

【作者名】

夢想花

【あらすじ】

人間に尽くす本能が機能していないアンドロイドが生産されてしまった。しかも、それが販売されてしまった。

機能に問題があるアンドロイドの女の子の物語です。

1・不良品

目を開けると、どこかに横になっていた。頭の上には大きな機械があつて騒々しい音をたてている。横を見ると白い台の上に女性が一人じつと横になつて見えた。周囲には機械がたくさんあつて工場のような感じの所だ。

「さあ、起きて」

声が出た方を見ると作業服を着た男が手を差し出している。手を伸ばすとその男が手をつかんで引き起こしてくれた。

頭がはつきりしない。ここはどこで自分は誰なのかまったく思い出せない。

「立てる？」

作業服の男がやさしく聞く。

台から足を下ろしてみた。白くてむき出しの足が見えた。一瞬、服を着ていないのかと思つて自分の体を見ると真っ白のワンピースを着ていた。スカートの部分が極端に短いので足がむき出しになっているのだ。

「ここは？」

彼に尋ねてみたが、女の声だった。私は女なのか？ 自分が男か女なのかも覚えていない。

「アンドロイド製造工場だ、君は今、出来たばかりなんだ」

「アンドロイド？」

なんの事かわからない。

「心配するな、出来たばかりの時はみんなそうなんだ。基本的な知識はすでにインプットしてあるが、経験が何もないからな」

彼が説明してくれるが、やはり意味がわからない。少し落ち着いてきて自分のまわりを見ると白い台の上にすわっていた。隣の女性と同じ台だ。隣の女性の向こう側はずつと白い台が並んでいて、それぞれの台の上には女性が横になっている。並んだ台の周囲には機

械がたくさんあって機械のトンネルのようになっていた。

「アンドロイドの製造ラインだ。向こうの端で組み立てが始まって、ここで完成する」

彼が説明してくれた。

隣の女性と同じ白い台の上に寝ていたという事は、私はひよっとして……

「私は、アンドロイドなんですか？」

「そう、アンドロイドだ。でも驚くことはない、俺もアンドロイドなんだ。ここにいるのは全部アンドロイド。アンドロイドがアンドロイドを作っている」

少し状況が理解できてきた。私はアンドロイドでいま完成したところなのだ。

「さあ降りて」

彼が手を引っ張る。そこで台から降りると自分の足で立ってみた。体がふらついて少しよろけた。

「体を動かせば運動機能の補正が行われるからふらつかなくなる。心配いらんよ」

彼は私が転倒しないようにしっかりと手をつかんでくれている。でも、体のバランスは転倒しそうなほどひどくはなかった。

「大丈夫です」

彼に手を離してもらった。

「俺はボブ、アンドロイドの完成検査を担当している。君の名前はセリー。224型の女性型アンドロイドだ」

「224？」

「人間のそばで家事などをするアンドロイドだ」

そうなのか。私はアンドロイド、つまりロボットでこれから仕事をしなければいけないのだ。

「こっちへおいで」

ボブは私をどこかに連れて行く。ボブについてある部屋に入ると、そこには雑然と機械が並んでいて、数人の女性が作業員と一緒に機

械の前にすわっていた。彼はそんな機械の前に彼女を座らせた。

「これから、完成検査をする。異常がないか調べるんだ」

「検査？」

ちよつと緊張する。自分が人間ではなくて機械だということがちよつとシヨックだったが、それは受け入れなければならない。それにみんなアンドロイドなのだ。

ボブが私の体の検査を始めた。アンドロイドだから関係ないと思うのだが、男性型の彼に女性型の自分の体を触られるのはどこかいやだった。

「嫌だろつが、少し我慢しなさい」

私が嫌がっているのがわかったのか、ボブは少しきつくそう言った。でも、不思議だった。

「アンドロイドなのに、なぜ、こんな風を感じるんですか？」

「アンドロイドには感情があるんだよ。アンドロイドは本能を持っていて本能に動機付けされて自律的に動くことができる。ロボットは命令されないと動かないが、アンドロイドは命令されなくても自分で行動を起こすことができる。この動機付けが感情と言われるやつなんだ」

ボブは検査をしながら説明してくれる。よく分からなかったがそういう風に作られているのだろう。

「アンドロイドの本能は人間の本能とほとんど同じなんだ。だから感じる感情も人間と同じになる。ただ、アンドロイドは人間よりも愛情豊に作られている。それと大きく違うのがアンドロイドは人間に尽くしたいという本能を持っている。しかもこの本能が他のどの本能よりも強い。だから、たとえ自分が死ぬ事になっても人間を助けたいと思うようになってるんだ」

ボブが説明してくれたが、ちよつと驚きだった。人間を救うために死んでもいいと思うようになってるなんて、どこか損をした気分だ。

ボブは体の検査を終えるとその結果を丁寧に検査票に書き込んで

いる。

「次はいくつか質問するから、本当に自分が感じる通りに答えて」
次の検査の説明してくれた。本能が正しく機能しているかを調べる検査らしい。

「では、最初の質問。仕事をするのはいやかね？」

質問が始まった。仕事は嫌じゃないが出来れば遊んでいたい。

「いやじゃないですが、一日中仕事するのはちよつと……」

本心を答えた。彼はにっこり笑うと次の質問へ進んでいった。

こつやつて百件くらいの質問があつた。ただ、人間のために死ぬるかとの質問には困つた。

「人間がバランスを崩して崖から落ちそうになっている。人間の手を引つ張ればその人間は助かるが、君はそのために崖から落ちて死ぬ事になる。どうするかね？」

こんな質問がたくさんあつた。返事に困つてしまふ。さっきの本能の説明では自分を犠牲にしても人間を救うと答えるべきなんだろうが、そんな事は出来そうにない。

首を傾げていると。

「迷つてるんだね？」

だまつて頷くしかなかった。

そして質問は全部終わったが、彼は黙つてじつと考えている。

「どうですか？」

検査の結果を知りたかつた。が、彼は憂鬱な顔で黙っている。

やがて検査票を脇に置くと彼は腕を組んだ。

「君は人間に尽くす本能が機能していない。どこかインストールがうまくいかなかつたんだろう」

そうかもしれない、まったく人間を助けようなんて感じない。

「それだと、どうなるんですか？」

彼はさらに深く腕組みをした。

「通常、アンドロイドは感情があるから一旦動き出したらスイッチを切ることはしない。アンドロイドのスイッチを切る事は殺すこと

と同じだからね。ただ……」

「ただ？」

セリーは息を飲んで次の言葉を待った。

「ただ、人間にとって危険なアンドロイドはスイッチは切らないといけない。人間に尽くす本能が機能していないアンドロイドは人間に危害を加える恐れがあるからスイッチを切る事になる」

ショックだった。殺される！！ 殺されるのだ。気持ちがつわずつて目が宙をさまよった。今この場で殺される。スイッチを切られてしまう。逃げよう、ともかくどこかに逃げなくては。

しかし、急に体がガクンと椅子に落ち込んでしまった。体をまったく動かすことができない。彼がスイッチを切ったらしい……。

「いやです……」

かすれた声だった。死ぬのは絶対にいやだった。

「いやです。お願い、助けて……」

目がかすんできた。どんどん視界が暗くなっていく。

「お願い……」

声が出ているのかもわからなかった。

わずか20分の生涯だった。このまま意識がなくなって、もう二度と目覚める事はない。

不意に視界が明るくなった。体も動く。

「俺には出来ない……」

小さな声が聞こえた。ボブが頭をたれて悲壮な顔をしている。

何があつたのか、なぜ急に動けるようになったのか、しばらくわからなかった。

彼はじつと下を向いていたが。

「君を殺すなんて出来ない…… 見逃してやるよ」

ボブが助けてくれたのだ。スイッチを戻してくれた。

ボブは顔を上げると、セリーの手をつかんだ。

「その代わり、絶対に人間に危害を加えるなよ。君がそんな事をす

れば俺まで殺されてしまう」

彼はセリーの目を睨みつけた。

「いいな、絶対にだぞ。どんな事があっても我慢するんだ」

ボブの目は恐ろしかった。自分がしていることの危険性に困惑している目だった。

「わかりました。絶対に迷惑はかけません」

セリーはきつぱりと答えた。どんな事があっても彼には迷惑はかけられない。

「いいな、絶対にだぞ!!」

彼はもう一度念をおすと、検査結果の紙をポケットにねじ込んだ。そして、新しい紙を取り出すとそれにどんだん嘘の結果を書き込み始めた。やさしいアンドロイドなんだ。

「ありがとう……」

なんとお礼を言っているかわからなかった。

彼は検査票を書き終えると。

「これでいい。最低ラインの合格にしとく」

「ありがとうございます。このご恩は決して忘れません……」

本当にありがたかった。命を助けてくれたのだ。彼に迷惑をかけるためにも、絶対に約束は破らない決心をした。どんな事があっても人間に逆らわない。アンドロイドだからそれが普通なのだ。「頭の中からアンドロイド規則を引き出して、読んでおきなさい。アンドロイドが守らなければならぬ事が書いてある」

ボブは険しい顔をして事務的に説明する。彼はこの忌まわしい一件を早く切り上げたいらしい。完成検査が終わると彼の担当はそこで終わりになるらしかった。

「ありがとうございます」

椅子から立ち上がると、何度も頭を下げてから廊下に向かった。

「ああ」

ボブが後ろから声をかけた。

「人間のために死ねるかと聞かれたら死ねると答えるんだぞ。いい

な

「わかりました」

笑顔で答えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5106z/>

わたし、不良品なんです

2011年12月17日12時03分発行